

## 二元統合の国語教育



広島大学助教授  
文学博士 藤原 与一

きょうは、私も、この研究協議会の一参加者として、「二元を統合する国語教育」という題の発表をいたしましたと存じます。

二元とは、どのように考えられましょうか。いろいろの二元が考えられます。これらをよく統合していけば、今日以後の国語教育は、いっそうよくなっていくのではないかと考えます。すくなくとも、二元を統合するよくな考えかたになっていけば、国語教育のいとなみは、大いに整理され、進歩すると思えます。

今日、国語教育の議論と研究とは、そうとうにやかましくして、いわば微細にもわたっています。私が、小学校に つとめている者として、これらの議論の流れをうけとろうとしますと、うけとることが、そうとうにむずかしく、いろいろにまよわされます。安心して日々の実践にいそしむことができるというような幸福感は、味わうことができません。私は世の国語教育者大衆として考えているのです。われわれが、もっと簡単に、安心してあゆんでいける常道というものが、開けていていいのではないかと思えます。もとより、研究が発展していけば、議論は複雑にもなってきます。しかし、真に力のある、大多数の人を円満に指導していくことのできる議論というもの、複雑さの後にくる、高い単純さを持ったものではないのでしょうか。今日、私どもの目にうつります国語教育の議論が、実践指導の文章でさえも、むずかしいことばでつづられていることその一つを考えてみました



も、いまだ、ものは、高い意味の単純さというところにはきていないと判断したいのです。

私どもは、国語教育研究で、ことに戦後、そうとうに、新しい研究を進めてまいりました。たとえばカリキュラムをわが手で考えるようになったこと、あるいは単元学習というようなものを開拓したことなど、たしかに、国語教育の一大進歩を成就しようとしているのであります。ここらあたりで、私どもは、現在のような、ことむずかしい国語教育界を、きれいに、上品に、単純化していいのではないでしようか。

今日の国語教育論、あるいは実践のくふうには、形式主義と言っているものがかなり強いように見えます。ものが、機械化しているというふうにも考えられます。この時、私どもは、生き生きとした単純さを思い求めてやみません。そういう単純さ、そこに、国語教育の常道——だれでも即して行ける常道——が開けると存じます。二元統合と、ここに統合観を提唱いたしますのも、そういう単純さ、高い単純さを求めてのことです。

(二)

それでは、どんなところに、二元の統合が考えられましようか。わかりやすいところからいってみます。国語教育の都会主義といなかぶり、この二つが統合調和されなくてはならないと考えます。これは地方々々について申すことであります。中央について申せば、つぎのようなことです。国語教育論の中央主義、あるいは自然に東京中心であることと、指導者諸氏がよく地方を見わたすことと、この二つが統合調和されなくてはならないということであります。

地方の国語教育は、一口にいうと、今日なおかなり古い状態にあると私は申したいのであります。ここにおおつまりのみなさんの社会をこえて、広く国内全般の様子を考えますときに、やはり古いと言いたいのです。が、その人たちはまた、求めるつよい気もちを持っています。そこで、都会風がはいつてきますと、われをわすれてそれにとりつきがちです。ここに都会主義の弊風がおこってきます。私は、ありきたりのいなかぶりと、この都会主義とが、ぜひ調和されなくてはならないと思ふのであります。

中央にも罪があるのではないでしようか。東京中心の人たちが地方を考えることは、時に私どもが意外とするほどに簡単であることがあります。たとえば、標準語というものを考えるにしても、存外やすやすと、東京語本





位にだけ標準語を考えていることがあります。私は、戦後ずっと、「東京の国語教育と地方の国語教育」ということを思ってきました。これは、東京の人たちにむかって言わなくてはならない題目だと考えます。どうかすると、中央に、地方を思うあたたかみが欠けています。今日の国語教育関係の書物を見ましても、これらはおおよそ都会的であります。月々の、実践指導の諸報告・諸研究も、多くは都会的であるように思います。地方をまわってみますのに、それらは、いなかのはての先生たちには、まだまだ、そうとうに距離の遠いものなのです。いなかのはてと言わなくてもよろしゅうございます。私どもが、県の大会というようなものに出てみましても、あつまる人はすいぶんさまざまであることを、痛感させられます。ここへは、いわゆる都会風は、どんなにもやわらげられて提供されなければならないと思うのであります。

われわれは、都会人といわず地方人といわず、いちおうはぜひ、自分に、「国土全般の上の国語教育——『国語教育』」を思い見る大局的な心が、つねにはたらいているかどうかを、反省してみなければならぬと存じます。

### (三)

つぎに、国語教育の議論の中みにはいつて二元の統合を考えますと、「文学教育と言語教育」の問題があります。かえりみますのに、国語教育を科学的に洗練していくためには、文学教育と言語教育とを、いちおう明確に定位する必要があります。ことに、おくれた言語教育を、正しい位置におき、その機能をじゅうぶんに發揮せしめるためには、まず、この二面を明らかにする必要があります。これによって、主観主義的な国語教育は、たしかに合理化されました。

しかし、このことを、私などの実際にとりおこなった経験によって、反省してみますのに、二元をわけたのはばらばらにしたのではありません。人間の両手両足、あるいは車の両輪のように、二つを分かちおいたのであります。大切なのは、一全体としての人間、あるいはくるまであり、一体としての国語教育です。ここに、二者統合の観点から、本能的に要求されると考えます。

説く人によれば、二者は全く別もので、統合などということは考えることができない、と言われるかもしれせん。いかにも、二つのものはちがいます。ことに、その作業の末端を考えてみますと、両者のへだたりは、たしかにあります。それにしても、言語教育を考えてみる場合、たとえば文法教育ですが、私どもがかって中等学



校で受けたような、あの文法教育ですと、まったく無味乾燥なものであります。こういう、死んだ言語教育を考えて、それで、言語教育と文学教育を云々するのであつたら、議論になりかねます。ことばの生きている場をとりえて文法を考えるようにしむける帰納的な経験的な文法教育、つまり生活語陶冶の文法教育であれば、終始、ことばの生きている場というものに即していくのですから、たとえば文芸作品のうえで、好ましい文法指導がどしどしとやれるわけです。これで、だいぶん、言語教育の作業が文学教育になつてきます。一方、文学教育のわから考えてみましても、私は、文学的表現をやらせる教育が、じつはもつとも生きているいい言語教育ではないかとさえ思っています。文学作品を読む、あるいは文学の理解・鑑賞ということにしましても、その作品・文章の一々の大切な語句をよくおさえて熟読することが、文学の理解であつてかつ文法読みというものだと思ひます。理解・鑑賞の教育は、ただただ正説を目的とする文法読みの言語教育を、じゅうぶんによまえていくはずと思ひます。

かたくなな言語教育は、なかなか文学教育をみのらせにくいことでしょうが、そこは、言語教育そのものを考へあらためなければなりません。弾力のある文学教育は、時にあざやかなくらいに、言語教育をみのらせませす。二つはちがうのですが、一方に出発しつつも、それがその本質にもとづいて徹底せしめられると、これはついに他を美しく包摂します。他の必要なものを完全に包摂するところへは容易にいきにくいとしても、すじみちとしては、他を包摂し得ます。

言語教育と文学教育との二者二元を、どのように別ものに考えようと、これが無関係のものとはだれしも思わなないでしょう。でしたら、私どもは、善意をもつて、二元のよい統合をはからねばならないと考えます。すくなくとも、その統合の心もちを持つことが、国語教育を穩当に進めていくうえに大切だということを、ここには強調したのであります。

車の両輪は心棒でつらねられています。人間の手も、たとえ右手きき・左手ききなどあつても、そのよくきく一方がつかわれる時、あいた方の手も、あい応じて調和的に行うています。二つは、二にして一であります。文学教育と言ひ、言語教育と言ひますが、要するに、いずれも、ことばの世界のしごとです。言ひかえると、言語表現、国語表現の世界のしごとです。文学を、表現の世界からはなれて考えることはいけませんと思ひます。いわゆる言語技術の教育を、生きた表現の場からそれてやるのはいけません。要は、つねに国語表

現を見つめる国語教育があるばかりであります。私どもは、研究を進めて自己の立場に立ちつつも、ものを謙虚に考え深め、開拓し得るかぎりのものを広く深く開拓していかなくてはならない、そして全的なものに近づいていかななくてはならないと考えます。

#### (四)

つぎに二元統合の題目としてとりあげたいのは、国語教育の論と国語国文の研究との二元統合であります。文学教育と言語教育との関係について議論が紛糾しますのも、一つには、国語国文の研究を深めることとは別個に教育論だけがやかましくなるからではないかと考えます。

ここに国語国文の研究と申ししても、いわゆる学者の研究といったようなものをすぐに意味するものではありません。国語教育者が、その人なりに、自分の身のまわりに、国語国文の現実の問題を見いだして、これを解決していくこと、そういう打ちこんだ生活が、私のいう研究ということです。

話しことばの教育を云々する人はじつに多うございます。ではその教育が、全国にわたって、そうとうに成功をおさめているかといえ、私は否と答えたいのです。話しことばの教育もまだまだというところですが、これはなぜでしょうか。話しことばの教育者自身が、話すとはどうすることであるかの根本問題を、いまだよく解決し得ていないからです。

今は、国語国文の研究の名のもとに、私どもみずからが国語国文にぶちあたって、現実の問題を、身をもって解決していくという研究態度を、みなさんとごいっしょに考えたいのです。私どもにとって、研究の方法とはどういうことかと申しますと、体験するということであり、おたがいに、教育論と国語国文の認識とが、自己の体験の中でほどよく融合するような境地を、求めていきたいものです。自己の体験の中にこの美しい融合統合があれば、その人の教育論は、ただの教育論となることなくして、強い力をもつてくるでしょう。私どもは、おのれの体験を越えて、多くものを言つてはならぬと存じます。このことが、おたがいに、実践をもつて生命とする実践家の、実践学の心得であります。私もみなさんと同様に、ひとりの実践者であり、いま申しましたような実践学にいそしもうとする者です。

体験にものをいわせて、ひとえに実践学をきずいていく時、おのれのほんとうの力量というものがわいてきま



す。この力量にもとづいておこなう教育論の発言は、おのずから、すぐれた美しい單純さをもつてくると考えます。

先日、私の友人が、国語教育と道徳教育というような、今ごろの話題を持ってきました。中学校につとめている人です。この人は、「話しことばの対人的な表現——ことばづかいに關するすべての教育は、とりもなおさずことばの人間道徳の教育になる。」ということは、よくわかつていたのです。私どもの一つ一つの對話は、相手がたに對することばづかいですから、相手を見て、その場に合せてものを言います。ことばづかいはすべて、「人間」の待遇表現であり、したがってまた、つねに自己の人格の表現となるものです。ここに、ことばづかいの教育には、そのすみからすみまで、おおらかな道徳教育がいきとどかなくてはならないことが明らかであります。このことをよく了解するその某君が、その学校の研究集会で、何か発表をしなくてはならぬというのです。そして、右のことだけ言ったのではどうもあつけないようだから、もっと何かを言いたい、と、こう言うのです。ところが、それから先のその人の意見は、聞いていて、あぶなっかしいものでした。思いますのに、この場合は、この人がおのれの体験でとらえたものを、率直に打ち出せばいいことであります。こうなれば、だれが聞いてもわかりやすく、聞く人は、なるほどこれは、あの人の実質でものを言っているなと、受けとるはずで、人が、その人の実質で言うことば、これが、その人の、国語教育の学問というものであります。それなのに、無理に何かを言おうとすると、浮いてきます。

私どもはあくまで自己に忠実に、研究即実践の学問をきすくべきです。国語について申せば、国語表現の世界に、研究即実践の学問をきすくべきです。このような学問の考えかたは、旧来の学問概念とはちがうかも知れませんが、私どもにとつては、これが、ぜひ求めなければならぬ、新しい学問概念です。こういう点で、われわれはみんな、国語教育の学問の学徒であることを自覚しなければならぬと考えます。

ところが、私どもはしばしば、国語教育の軽はずみな学徒になつてゐることがあります。この点を反省するにつけ、つぎに述べたい項目がおこつてまいります。

(四)

それは、広く求めることと、深く考えることとの二元の統合といふことです。このことがぜひ必要だと痛感し



ます。

広く求めることは、いいことであります。が、深みを求めなかつたら、けっきょく、自分のものというものはできません。言いかえれば、自己の痛切な体験というものはうまれません。

広く求める態度は、わるくすると、目新しさを追うばかりになりがちです。それはまた、目新しくさえあれば質は問わないというような態度にもなりがちです。こうして、態度の軽薄さが生じ、考え深める生活がおろそかになります。私どもの国語教育界に、この風が、いったいどんな程度に、あるでしょうか。——どうしても、深みを求めて掘り下げていく読書研究の生活を重んじなければならぬと存じます。われわれの国語教育界に、その風をつよくしたいものです。実践者には実践家独自の学問のしかたがそなわっています。それをつよくつかんでゆるがず、わが道を行くようにしたいものです。しかも、偏狭には流れないようにと、心がけたいものです。今日、このような席に参上しますと、いっそう思わせられることでございますが、指導の任にあるかた、指導的な地位にあつて世の中への影響力の大きいかたがた、こういうかたがたには、とりわけ、求めることを深く深くと掘り下げていただきたいと、お願いしたいのです。広くと深くの問題を、深くの方向から解決していただきたい、と申し上げたいのです。私に、この点についてのいくらかの経験がありますので、失礼をかえりみず、あえてこんなになら申し上げます。浅く広く読んであるき、あれ・これ・それをちよつちよつとつまみとり、それらをつらねて、そこに自分の意見のあみをはるといふような時、これの悪影響は、早く広く浸潤するようです。今日、国語教育界に一つの怠惰な風があるとしますれば、これを救うのは、指導の立場にあるかたがたの、発言・見識の深さです。一つの見解が、おさえてみればぶよぶよとしているというようでは、これは危険な物知りすぎません。こう思つて、私も、自身をつよくいましめています。

(六)

二元の統合は、国語教育の実際について、事ごとに申したいのです。表現力陶冶と理解力陶冶、この二元の統合は根本的な題目であります。その中について申し上げますと、書き表すことの教育と話すことの教育との二元の統合が大切です。読むことの教育と聞くことの教育との二元の統合が大切です。

世には、右の四つの活動が、いづくあいに関連させられないで、それこれのことが、ただ複雑化しているきら



いがないではありません。ここには、高い意味の単純化が望ましいと思います。その大統合の帰着する点と申しますと、さっきらい主張いたします国語表現の世界であります。

時の問題について、やはり二元統合の必要を感じるものを見ますと、生活つづりかたと作文教育の議論があります。これなども、考えかたが、じつにむずかしくなっているように思います。対立の中に進歩があるには相違ありませんが、早く進歩させたいものです。私どもの願わしいのは、対立そのことではなくて、ものごとの進歩です。対立の複雑な議論の中に、早く進歩の光をみとめたいものです。すくなくとも、ここに統合観が確立されれば、世の多くの国語教育者は、安んじて、今日のつづりかた教育・表現教育に邁進することができると信じます。さて統合観確立の場は、国語表現の世界そのものにあると存じます。

實際上の諸問題について、それぞれに考えられる統合は、すべて、国語表現の世界を正しく見つめることによって得られる、正しく見つめてそこに全努力を結集することによって得られると考えます。国語教育のしごとは国語表現の世界を厳格にとり守るところに、明確に成立し、ここでその独自性がはっきりとします。

(七)

考えてみますれば、いろいろな二元があります。いずれも、二元はそれぞれにとるといものであります。が、その二元は、統合されなくてはなりません。多くの普通人のためには、道はやはり中道にあります。

私は、統合の必要であることを、もっぱら一般論として述べました。実践者個々人としては、いよいよ自分です。統合のなやみをなやんでいかなければなりません。実践の道のけわしさであります。

であつても、ここでぜひ私が述べたいのは、私自身の経験ですが、おのれの立場にもとづく特殊なものをつよく主張しようとするれば、どうしても、おのれに反対のものをじゅうぶんに包んでいく学問態度を持たなくてはならないということです。統合なくしては、進めないということです。私どもは、その点で、いやおうなしに、自己否定のきびしい修業を課せられています。

どのような一元のいいものも、それをそれとしてだけ強調しているあいだはまだあまいのだと、私は私に言いきかせます。あるものがほんとうによくわかつてくれば、われわれは、もはや手ばなしにその一元的なものだけをやかましく言うことはできなくなつてきます。私どもは、多元の統合へと、精神發展の道を歩むよう







に、知性の宿命をせおっています。

それにもかかわらず、現状を見ると、そこにいろいろの二元があるのは、これが現段階というものであり、なやみの現実のすがたと言うべきものでありましょう。私もは、このなやみを打破したいいなやみに、つねにやんでいきます。ここで考えてみますのに、その打破のむすかしさは、一つには、根原的に、日本人の在来のものと考えかた、思考の型というものによるのではないでしようか。ここに根本的な是正点、発展させなくてはならない点があるように思います。

私どものありきたりのもの見かたは、ものをよこにねかせて見ることにながれやすく、たてにおこして見ることにはあまりしません。あるいは、ものが静かによこたわつているのを見るのに切であつて、そのうごくさまは、たらくさま、伸びゆくさまを見ることがうといと言えようであります。ものを動的に、生命発展のすがたにおいてながめることがよわくて、ものを静的に見すえることが多いのではないでしようか。ほかのことばで言いますと、統合発展の論理力によわいと言ふことができるのではないかと考えます。

自力と他力とか、白と黒とかいつたようなくさぐさのものが、ただありきたりの対立のまま、私どもの周囲によこたわつています。そういう状態の中にあるのが、私どもの生活のようです。身近な例をとりましても、たとえば話す表現の生活で、同じことを、甲の前では甲の氣にいうように言い、乙の前に出れば、甲にそむくように話しつけるといふことなど、単純な二元生活です。ここに、自己に忠実に生きるといふ、話す道徳があることは明瞭であります。生活の統一を実現しなくてはならないことが明らかであります。

こう考えてきますと、私どもの従来の、ただに白と黒とを静的にならべて見るような思考の態度は、たしかにたんれんしていかなければならないことがみとめられます。根底改造の心がけがいろいろとあります。——基底面にかえりみて、自分の考えかたを、大きく発展させていくことにつとめなくてはならないでしよう。

国語教育・国語教育論の多元統合点は、厳密に言つて、国語表現の世界といふことでした。かならず表現に出発すべきであり、どこまでいつても、最後には、かならず表現の世界にかえつてくるべきであります。

このように単純化して受けとれる国語教育の世界、国語教育の領域に立つて、不断に堅持すべき国語教育の目的を思う時、私は、最後には、つぎのように申したいのです。表現に真実を求めさせ、表現の真実に生きさせることであります。多元的に議論のやかましい国語教育の目標というものも、究極の目的としては、真実を求めに求めさせる国語教育といふことでよいのではないでしようか。もとより、国語表現の生活（表現とと理解）においてであります。ここで私は、けつして、「今この社会において何が真実であるか。」というような議論へいく





ものではありません。もつと低いことを言っているのです。つまり、読んでその文章表現に真実を読みとり、聞いてそのことばから真実を聞きとる、要するに表現されたものから真を受けとる、また、話してつねにおのれの真実を語り、書き表して自己の生活の真実を率直に表現する、つまり人間と生活とをすなおに表現する、

というようにしむけることを言っています。私は、これが、表現と理解とをまとめた表現の社会生活の真実に生きさせる国語教育だと考えます。こういう真実を求めさせる国語教育こそ、国語教育の現実と理想とをつらぬく不断の大目標でなくてはならぬと考えます。簡明にこう考える時、われわれの毎日のいとなみの道は、まことに明らかとなります。

表現と真実というところへきて明らかかとおり、今日私どもがふるいおこさなくてはならないのは、理の国語教育、理の教育です。理がはたらかなくては、真はとらえられません。また、真を的確に実現することはできません。理性をたんねんする国語教育が、ここにつよく要望されます。いわゆる科学教育のがわからず、理の国語教育、理性をきたえる国語教育がつよく要請されますが、いま表現の真と真とを考えてみましても、まったく同様に、国語教育が理を重んじなければならぬことが明らかとなつてまいります。

理の国語教育は、思考力・推理力の国語教育であります。国語力としての思考力・推理力が、きわめて重要なものとなります。これは、小学校課程から中学校、高等学校、大学にわたつて、すべての国語教育で考えなければならぬことであります。今日のおとなたちの国語生活を見ましても、ときにあまりにも思考の力がよわく、推理の力が浅いために、せつかく目の前に何かすぐれた内容の宝の箱をむかえても、あけることができないというしまつです。宝の箱をあけるかぎは、思考力・推理力です。

国語教育の人間形成といふことも、じつにこの思考力・推理力を陶冶啓蒙するところへいかななくてはならないと存じます。思考力・推理力に富んだ人間を形成することこそ急務であります。人間形成に関する議論が、区々とした局部論におぼれて、大局の方向を見うしなうようなことがあつてはなりません。

以上、二元を統合する国語教育ということを申しあげました。最後に申し上げたいことは、時代と社会に即しかつ時代と社会を越えていくところの国語教育観が世に本格的にさかんならなくてはならない

ということであります。私のつたない発表が、みなさんの、そうした意味での、大所高所に立たれての御努力に、いくらかでも参考となりますれば幸であります。

